

# 最初の外国保険詐欺

長谷川時雨

青空文庫



この章にうつろうとして、あんぽんたんはあまりあんぽんたんであつた事を残念に思う。ここに書こうとする事は、私の幼時の記憶と、おぼろげに聞き<sup>かじ</sup>づいていただけの話ではちと荷がかちすぎる。

私はまことに呑<sup>のん</sup>気な、ぽかんとした顔をしているが、私というものが生をこの世にうける前は江戸が甦<sup>こうせい</sup>生<sup>せい</sup>し、新たに生れた東京という都<sup>みやこ</sup>が、総てに新生の姿をとつて漸<sup>ようや</sup>く腰がすわつたところであつた。いたるところに文明開化という言葉がもちいられた。チヨン鬻<sup>まげ</sup>がとれて、腰の刀が廃された位の相違ではない。一般庶民が王侯と肩をならべられるようになったのだ。これはなんとい

う急激な改革だかしのれない。昨日まで土下座どげざの身分の者が、ともかく同等の権利を認められようというのだ。そして憲法は發布され、国会も開設されようというのだ。

そしてそこには幾多の衝突と犠牲があつた。幕末からかけて五、六十年間、尊い血潮が流され、有為ゆうゐの士の多くが倒れている。その最後が佐賀の乱、西南せいなんの役えきであるが、自由党の頭とうしよ初しよとい倒幕維新の大きな渦の中にはフランスコンミュンの影もかなり濃かつたのではなからうか、時代の流れ、思潮の渦は、この島国の首都をも捲まきこんだのであつた。

私はなんでそんなむずかしいことを言いだしたかという、  
「娼妓解放令しょうぎ」についていいたかつたからだ、あんぽんたん

はそれを聞いておくにはあまり幼稚すぎた。いま私が語ろうとする、おぼろげながら私の頭に残る二人の男は、その当時での当世男であると思うが、いつでもきける話だと思つていた油断が父が死んでしまったので、私の記憶はただ外形だけのものとなつてしまった。その一人を通称金兵衛さんといつた松本秀造という人と、秀造さんの妹いもとの御亭主清水異之助しみずいのすけという人だ。

秀造さんは吉原のおおまがき大籬きんぺい金瓶だいこく大黒の恋婿で、吉原に文明開化をもちこんで、幾分でも吉原を明るくしたかわりに養家はつぶしてしまつた人。異之助さんは本邦最初の、外国火災保険詐欺をやつた男。

秀造さんは眼から鼻へぬけるような才人だつたという——これ

は後に大人が言ってるのを聞いていたのだが、吉原の積立金（税金だともきいた）使い込み事件で体があぶない時、父にかくまわれていた。

そのころ私は赤ん坊で、家は大火事に焼かれて土蔵前に庇ひさしかけをしていたというから、明治十三、四年のころでもあつたらう。

ある夜、神田柳原河岸の米屋、村勝という爺じいさんにつれられて、唐とう棧げんの絆はん纏てんを着て手拭てぬぐいの吉原かむり、枝豆や里芋かごの籠かごを包んだ小風呂敷を肩にむすんで、ずっと這はい入いって来たのが秀造さんだという。

金瓶大黒という名はよく講談にも出てくる。目下、『日日新聞』夕刊のに載のっている田中貢太郎たなかこうたろう氏の「旋風時代」には金瓶大黒と

して、時の高官たちの遊興ぶりを書いてある。事実その遊びぶり  
 は大たいたものであつたらしい。金瓶大黒の今紫の男舞といえは、  
 明治もずっと末になつて、今紫といった妓この晩年まで地方の劇場  
 では売りものにしていた。その今紫には、土佐の容堂侯が硝子ガラスの  
 大姿鏡おおすがたみをかつぎこませたのを、うらやましがつてお婆さんにな  
 つてもその事ばかりいつていた女もある。金欄手きんらんての陶器の高脚コップ  
 で、酒盛りをしたものと見えて、私の家にも、その幾個いくつかがきて  
 いた。

秀造さんは上野の（山内さんないの寺院おてら）のおちごさんで美貌びぼうで評判  
 だったそうだ。振袖姿で吉原へ通つて、吉原雀というあだ名だつ  
 た。鬼の金兵衛さんとよばれた楼主ろうしゆの娘おやすさんに惚ほれられ

て養子になった。このお父さんの方の金兵衛さんは大柄な人で、美男でおちごさんの婿には不服だったが、よつぽど娘が可愛かったものと見えて秀造さんを養子にした。

この、おやすさんという女を、私が十一、二になってから見覚えている印象は、とても大柄なすらりとした——まだコートはない時分だったから、吉原から人力車くるまでくるのに、上に黒ちりめんねんの羽織を着てきて玄関で脱いでいた。下にもひとつ羽織を着ていた。根下りの丸髻ねさがに大きな珊瑚珠さんごじゆの簪かんざしを挿し、鼈べっこう甲こうの櫛くしをさしていた、ことさらに私の眼についているのは、大きくとつた前髪ひたいのあまりを、ふっさりきつて二つにわけ、前額ひたいの方へさげている。これは下町の娘たちはみんなそうしていたが、すこし大きく



なると、も一つ奥の、鬘まげの横前へ、分けないで片っぱだけにして毛のきりめをゾッキリと揃えて曲げておく——男の小姓鬘の前髪のように——その風俗が四十位の女の人がしていておかしくないほど、パラリとした顔立ちの、派手者はでしやだった。

秀造さんは私の老母ははにいわせると、伊井蓉峰いじようほうの顔を、もつと優しく——優しくの意味は美男を鼻にかけない——柔和にゆうわにしたようなどと言っている。私の眼には文壇では里見さんを大柄にして、ドツシリと落ちつかせ、ソツなく愛あい嬌きようをもたせた面影おもかげが残っている。

金瓶大黒はそうした時代の空気につつまれ、そしてまたその時代のある空気をつくっていた。高位高官の宿坊であり、鬼の金兵

衛さんがパリパリさせていた楼みせではあり、そこへこの新智識の才子が大事の娘の恋婿である。言うことに行なわれないことはない。吉原の改革はズバズバと行われた。その廓さとの権者きりものが日影者になったのだから、吉原の動揺は一通りではなかつたろう。ここで私に分らないのは、土地のためにならない事をしたのならば、土地のものがござつて彼をかばうわけはないから、この税金消費事件には何か綾がありそうに思われる。後に金瓶大黒は娼妓しょうぎも二、三人になり、しがなくなつて止めたそうだが、浅草観世音仁王門わきの弁天山の弁天様の池を埋めたり、仲見世を造つたり、六区に大がかりな富士山の模型をつくつたりした。公園事務所長は初代が福地桜痴居士ふくちおうちこじ、二代目が若い方の金兵衛さんだときいた。

秀造さんは蔵の二階にかくまわれたのだ。階下したは祖母の住居になつて、さしかけへ赤ん坊の私と両親がいたわけだ。そんなところへよく逃げこんだものだが、隠密おんみつがくると（隠密とはスパイ）、父はわざと蔵の階下へ通して話をするので他の者がハラハラしたという。この裁判は勝訴になつたのだそうだ。そんなばかな話もあるまいが、私の老母はははうる覚えでこんな事をいつている。裁判官が代言人の父に「では、それだけの金をどうしてつくる。」——保証するという意味をいうのであろう。

父の答えがふるつている。「私の母はあの辺で有名な金持ちでありますからおしらべになればわかります。私は母の金をかりて納めます。」

裁判官「さようか。」

嘘うそでない、それですんだのだといっているが、そんなばかなはずはない。それに吉原の方では、金は吉原から出して決して自由をさせないからと言って来たが、とうとう出さないで済んだといっている。しかし父は秀造さんを自首させたそうさ。すこしばかり未決にいて放免になったがこの事件は被告が無罪になるまでにはかなりの骨折だったので、吉原では私の父でなければならぬいように大事にした。

またその頃でもあろうか、吉原に娼妓の自由廃業があつた。これは恥かしい事に父が楼主の方の味方をして勝たせた不名誉な事件だ。勝ったときくと、全国の女郎屋からおなじような訴訟を頼

ンできた。母は欲張つて商しやうばい業はんじやう繁昌だとよろこんだが、父は  
 断わつて、あれは、あの事件が最後になるもので、もう法律が変  
 るといつて諭いましめたそうだ。私はいまこれらの事をよくきいておか  
 なかつたのを悔くやんでいる。娼妓解放と、この自由廃業とのことに  
 ついて耳にとめておいたらば、もすこし報告的なことが書けたで  
 あろうに――

ともあれ金兵衛さんの生活は豪華だつたものに違いない。私が  
 もっている古裂ふるぎれに、中ちゆう巾うはばの絹縮みに唐人が体操をしている  
 図柄ずらばの更紗さらさがある。それを一ひと巻まきもつて来て、私の着物の無垢むくに  
 仕立たのも金兵衛さんの秀造おじさんである。六代目菊五郎の幼  
 時にも、横浜からおなじ柄の着物をもらったというので、いつぞ

や裂地きれじをくらべて見たが、秀造おじさんの手に入れたのの方が上等品であつた。その他ほかに、好事こうずな手だんすだとか、古い竹屋町裂れでつくつた茶ぶくさ入れだとかみな大名道具であつた。私の父はよくいった。他人の泣きよろを悦よろこぶ不浄ぜにな錢で買ったのだと。――

秀造さんの兄弟は、かなり有名な人たちであつた。沼間守一ぬまもりかずと  
いう刑法学者、銀行家の須藤、代言人の高梨哲四郎——この人は  
長髪で騎馬へ乗り歩くので有名だつた。その頃の代言人（弁護士）  
は長髪の人が多かつたが、高梨は白皙はくせき美貌びぼう、長髪がよく似合つ  
た。

清水異之助さんは、秀造さんの妹を細君にして、横浜で外国商館の番頭と通弁をかねていた。この人は坂東しうか（今の中村吉右衛門のお父さん歌六の弟のしうかではない、もう一代前の有名な役者）と、品川の土蔵相模どぞうさがみという妓楼の娘との仲に出来た子だという。

ある日、あんぽんたんの家の前に近所の人たちが立っていた。その人だかりの中には、日ごろは外おもてなどへ出たこともない大問屋の内儀ないぎたちも交っている。私はよそから帰って来て、なにごとだろうかと思つた。それよりも小さな子供らしいことで、自分もみんなに交つて、自分の家になにあるのかと立って見ていた（見物の雰囲気がやわらかいものであつたのが、子供にも安心させて

いたものであろう)。

そこにはピカピカした黒塗りの車があった。車夫は勢いのいい人たちで汗をふいていた。一人はさしびきの綱を肩からかけていた。

何が出てくるかな? と私も好奇心に待ちながめっていると、横浜の清水さんが長い顔に山高帽子をかぶって出てきて、車に載った。見物人はざわついた。

「しうかだ、しうかだ。」

「松島屋だ、我童<sup>がどう</sup>だ。」

「違<sup>ちが</sup>う時蔵だ。」

みんな役者の名である。あんぽんたんは通弁さんだということ



を知っているからニコリと笑った。すると、通弁さんもニコリと笑った。青い顔に、薄芋うすいもがあつて鼻が高い。

見物たちはきまり悪くもなく、しうかだの、時蔵だの、我童だのと取り廻いて騒いだ。車が曳ひきだせないの、通弁さんは車の上から、

「あぶない、あぶない。」

なんて、技巧的に、やや身を前屈かがみにして、手を出して制した。そして反身そりみになつて車を飛ばせた。前綱は片手をグルグル振つて、見送られているので得意に駈かけた。

あんぽんたんがポカンとしてしていると、近所の女たちはいった。

「いいわねえ、あなたのところ、役者がくるのねえ。」

私は返事に困った。その通辞さんが、廿万円の火災保険の最初の詐欺をしたのだ。その時分日本にはまだ保険事業はなかった。外国との契約にしても早い方なのであろう。

この事件も、どんな風にまたどうけいそう繋争したかということが知れたら面白くもあり、一つの記録ともなるであらうし、清水という人の性格もしっていたら書きたいが、子供心にはそうたいした事件ことであらうと思うどころか、覚えていたのが不思議なほどの、かすかな聞きかじりだ。老母ははにきいても、ぼんやりと、そんなこともあつたつけというだけにしか覚えていない。

ある朝、お父さんが新聞に眼を通してしていると、横浜山手の、ある商館番頭の新築の家が焼けたと出ていた。それを見ると、父は

「ああ、やったな。」と叫んだと、老母は言った。

その家には外国の火災保険がついていたのだ――

家財はその前に運び出してある。細君は東京によこし、自分とコツクだけだったのだ。だが、彼は服罪しない。獄にもいれられた。だが、保険金は手にはいったのだ。商館では腕ききな番頭なので彼の下獄に困らされて、罪にしたくないといったのだとか。

とりとめもない記憶だが、私はこの二人の人を思出すと、時代の子という感を深くする。この人たちのそうした道にゆく心の動きと時代相を、もつとよく知ってるものにきかせてもらったならば、鬱<sup>うっぱつ</sup>勃<sup>ぼつ</sup>たる野心と機智をもったこの男たちが、どんな気持ちで田舎侍の権官らの躍るにまかせる時代を睨<sup>ね</sup>めたか、一足飛びに

平民の世界がくるように思えていて、その実士族の上下がひっくりかえったばかりだった世相に、才人だった彼らの不満がなかつたか――

# 青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 最初の外国保険詐欺

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>